

令和3年度全国学力・学習状況調査 報告書

1 調査の目的

- ・ 義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査実施日

令和3年5月27日(木)

3 調査対象

小学校第6学年、中学校第3学年

本市の実施状況	実施校数	当日実施した児童生徒数 ※	
		国語	算数・数学
小学校	16校	1,492名	1,492名
中学校	7校	1,266名	1,266名

※ 後日実施した児童生徒の結果は集計値に含まれません。

4 調査内容

(1) 教科に関する調査 国語、算数・数学

- ・ 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ・ 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

(2) 生活習慣や学校環境等に関する質問紙調査

- ・ 児童生徒に対する調査
(学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関すること)
- ・ 学校に対する調査
(学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関すること)

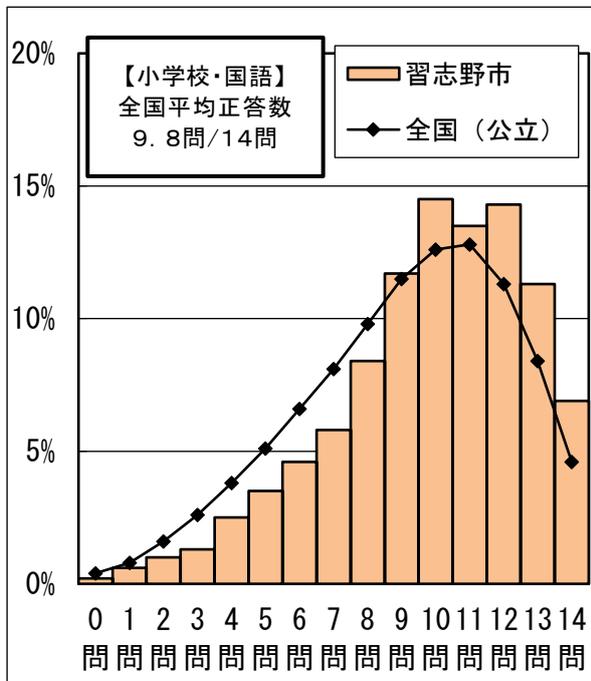
5 教科に関する調査の結果

(1) 小学校・国語

① 正答率(本市と全国)

	習志野市(%)	全国(%)
国語	70	64.7

② 正答数分布(本市)



④ 成果と課題・今後の取り組み

成果

全体の正答率やどの観点においても全国平均を約5%上回っている状況である。とりわけ、「話すこと・聞くこと」に関しては、正答率が非常に高い。各校で培ってきた学習習慣を基盤に、話し手の意図を汲みながら聞く経験や、学び合いの形態を工夫してきたことが結果に表れていると考える。また、文章中に出てくる漢字を適切に書く設問の正答率も高いことから、言語事項習得のための粘り強い取り組みが結果につながっていると考える。

状況調査からは、本市児童の読書に対する関心の高さが読み取れるが、読書との相関関係を伺わせる結果であるといえるのではないかと考える。

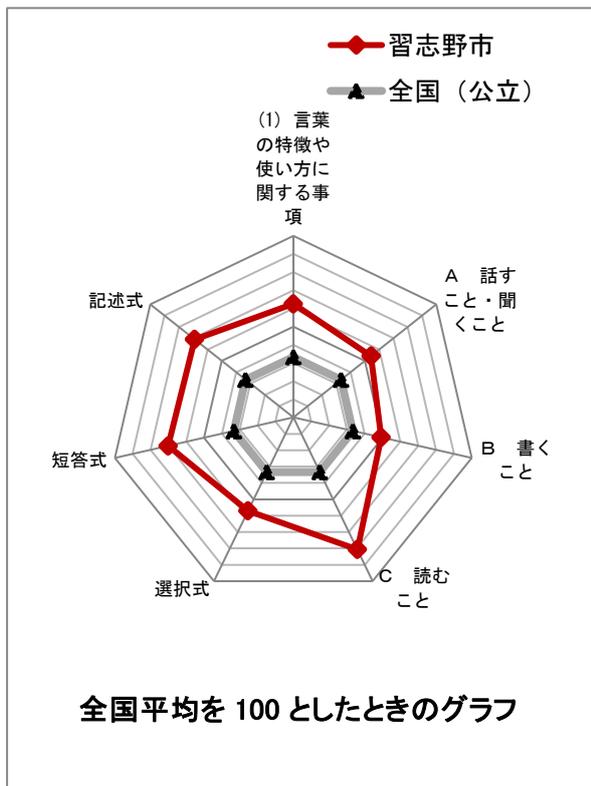
課題

無解答率は全国平均よりは低いですが、記述式における無解答が多い傾向にある。特に、条件に合わせて適切に自分の考えを「書くこと」の課題が大きい。

今後の取り組み

改善するためには、文章や問われていることの要旨を読み取る力、条件を生かしながら文章に書く力など「読む」「書く」の両輪を鍛えていくことが肝要である。そのためには、様々な種類の文章に慣れ親しむことや、自分の考えを文字で表現したり、毎時間の授業の振り返りを自分の言葉で綴ったりすることで、「書くこと」の習慣化を図ることが必要だと考える。ステップを踏みながら量を徐々に増やすことや、条件を加えていくことでレベルアップにつなげたい。また、書いたものを互いに読み合い、良さを伝え合う活動を設定することで子供たちの「書くこと」の楽しさを味わわせていきたい。

<学習指導要領の内容の平均正答率の状況>

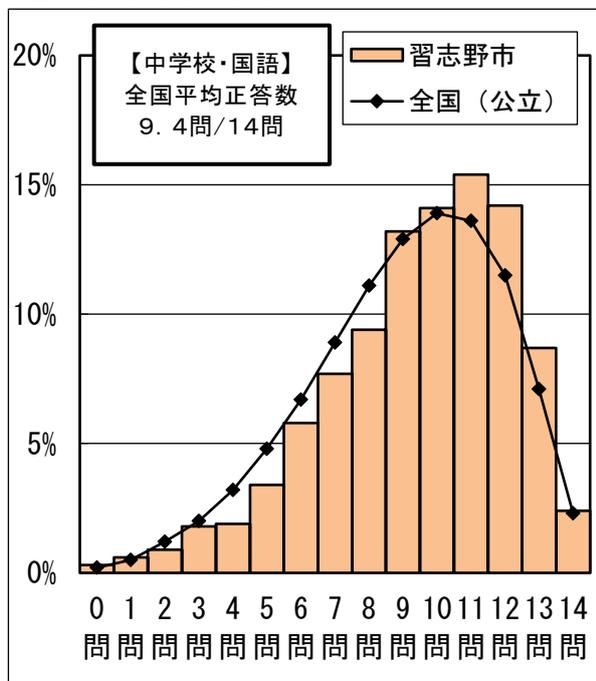


(2) 中学校・国語

① 正答率(本市と全国)

	習志野市(%)	全国(%)
国語	67	64.6

② 正答数分布(本市)



④ 成果と課題・今後の取り組み

成果

全体の正答率、各評価の観点項目ともに1%~5%全国平均を上回っている。なかでも、「話すこと・聞くこと」領域での正答率が高い。設問では、複数の話し手の主張がフキダシで明確に分けられているが、「読む力」の高さが複数の話し手の主張をよりの確に捉えて話すことに結び付いていると考える。

夏目漱石の「吾輩は猫である」の一部を取り上げた設問では、記述式解答での無解答はあるものの、なじみの薄い一見難解な文章であっても、表現や背景に着目して内容を理解することができていた。

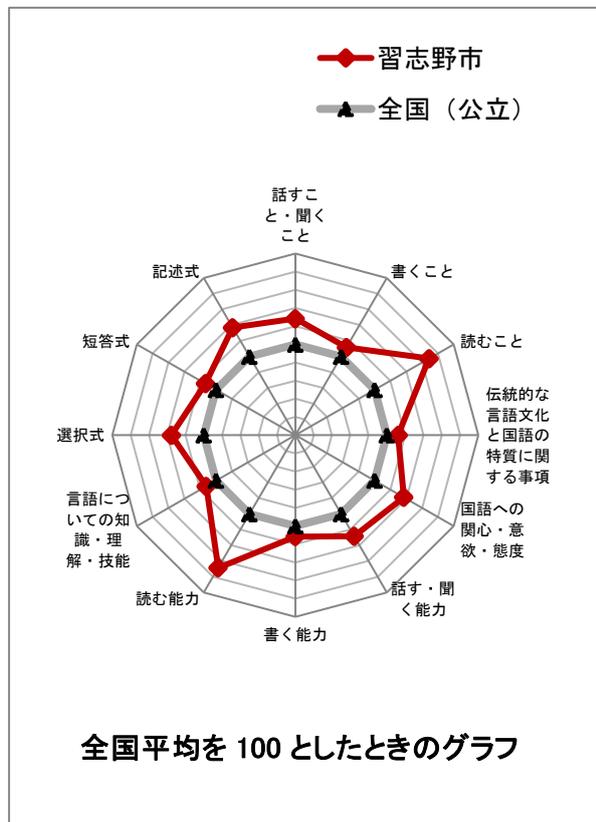
課題

大きく2点ある。1点目は、「書いた文章を読み返し、語句や文の使い方、段落相互の関係に注意して書く」ことである。正答を導くためには、意見文の各段落で述べられている筆者の考えを要約する必要がある。そして、設問の主旨や条件に照らし合わせ、推敲して解答につなげる力が求められる。2点目は、「文章に表れているものの見方や考え方を捉え、自分の考えをもつこと」である。全国平均を上回っているものの、全体の正答率は低く、無解答率も高い。

今後の取り組み

上記2点の課題を克服するためには、まず設問の意図を正確に読み取ることや、根拠をもって自分の考えを表現することを積み重ねていく必要があると考える。そして、自分の表現した文章を読み返し、推敲する活動も効果があると考え。

<学習指導要領の内容の平均正答率の状況>

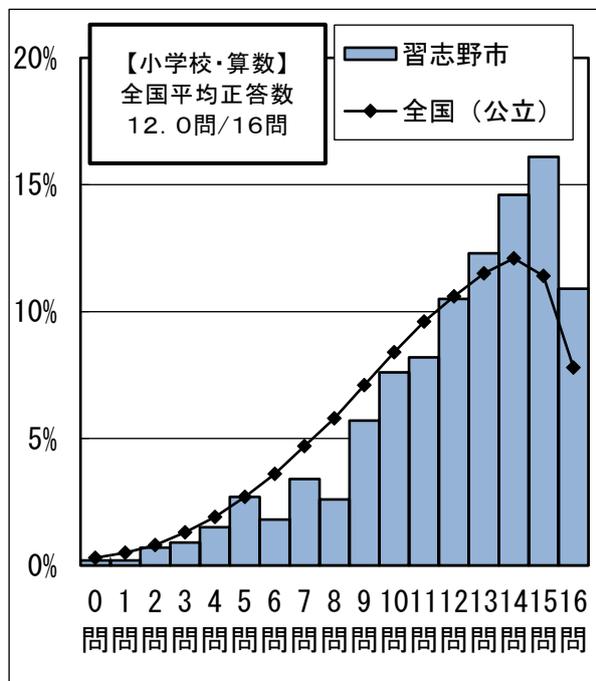


(3) 小学校・算数

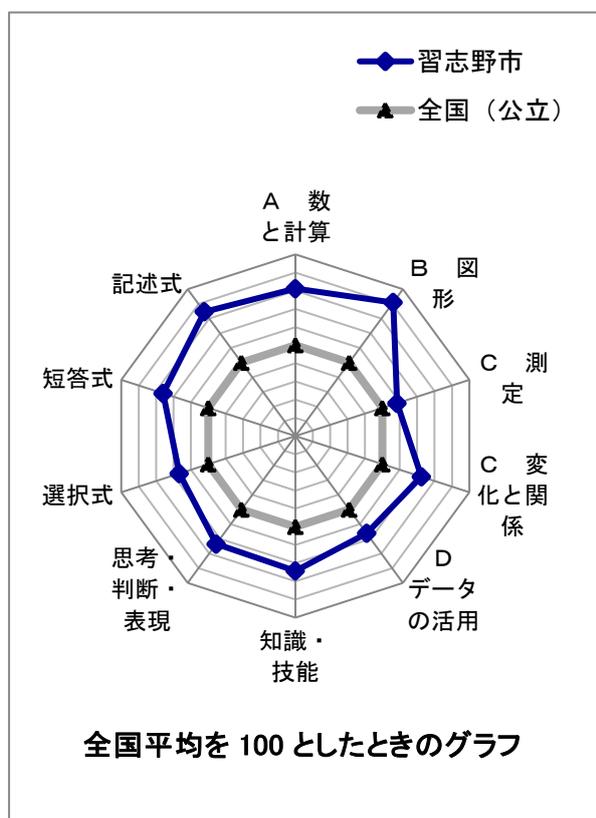
① 正答率(本市と全国)

	習志野市(%)	全国(%)
算数	75	70.2

② 正答数分布(本市)



<学習指導要領の内容の平均正答率の状況>



④ 成果と課題・今後の取り組み

成果

全体の正答率やどの観点においても全国平均を大きく上回っている状況である。

特に「B 図形」の領域が全国平均を大きく上回っている。複数の図形を組み合わせた図形の面積を比較する問題では、組み合わせ方によって形が異なっても元の形が変わらなければ面積も変わらないことを理解し、比較することができていた。また、3辺の長さがわかっている三角形の面積を求める問題では、求積に必要な情報を選択し、正確に求めることができていた。図形の特徴を捉え、解決の見通しをもって問題解決に向かっていると考える。

課題

問題形式が「記述式」のものについて、平均正答率は全国平均を上回っている傾向にあるものの、平均正答率は50～60%程度となっており、大きな課題である。

「C 測定」複数の図形を組み合わせた平行四辺形について、図形を構成する要素などに着目し、図形の構成の仕方を捉えて、面積の求め方と答えを記述する問題では、面積の求積公式は知識として得ているが、その公式を応用して平行四辺形の高さを求めることができなかつたり、高さを求める方法を記述できなかつたりといった誤答が多かった。

「A 数と計算」小数を用いた倍についての説明を解釈し、ほかの数値の場合に適用して、基準量を1としたときに比較量が示された小数に当たる理由を記述する問題でも誤答が多い。念頭では理解していても文字に起こして記述することができない児童が多い傾向がうかがえる。

今後の取り組み

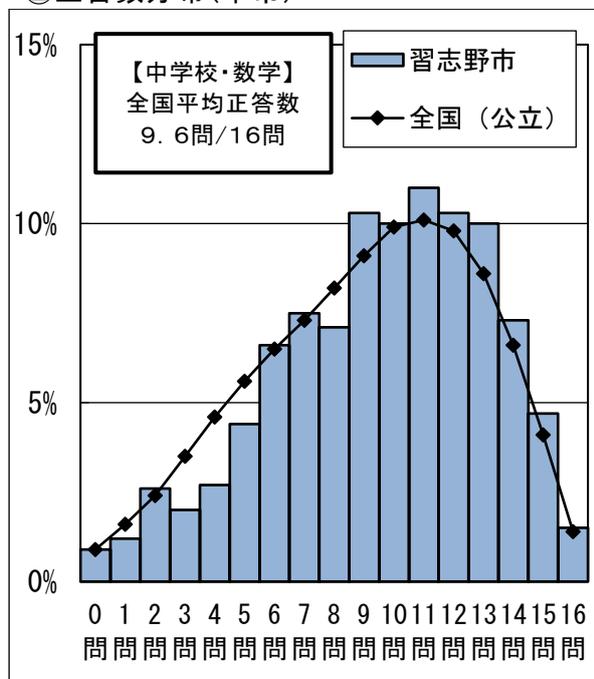
授業の中で、自分の考えをノートに書く際に、数学的な表現方法を用いて記述する方法を指導し、その時間を十分確保することから始めていくことが重要であると考えます。

(4) 中学校・数学

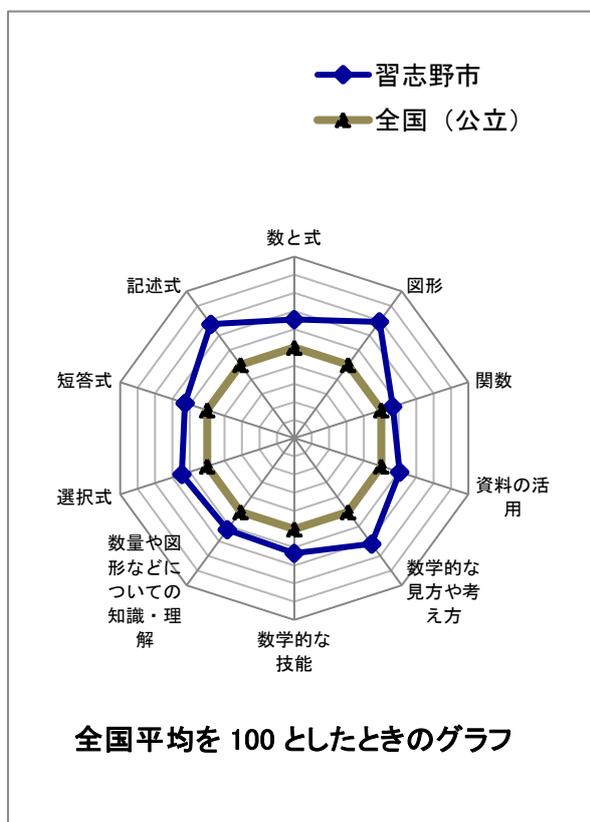
① 正答率(本市と全国)

	習志野市(%)	全国(%)
数学	60	57.2

② 正答数分布(本市)



<学習指導要領の内容の平均正答率の状況>



④ 成果と課題・今後の取り組み

成果

全体の正答率やどの観点においても全国平均を約5%上回っている状況である。特に「図形」の領域が全国の平均正答率を大きく上回っている。扇形の中心角と弧の長さや面積との関係を捉え、弧の長さを求める問題や、2つの合同な直角三角形を重ねたときにできる角の大きさについて、錯角が等しくなるための2直線の位置関係を理解し、答えを求める問題の平均正答率が全国平均を3%以上上回っている。図形の構成要素やその特徴を捉え、問題解決に取り組むことができていると考える。

課題

問題形式が「記述式」のものについて、全国的に正答率が低い傾向にある。本市においても同様で、「記述式」問題の平均正答率は全国の平均正答率を上回っているものの、他の出題形式の問題と比較すると平均正答率は低い傾向にあり大きな課題である。特に、与えられた表やグラフを用いて時間をはかるために必要な砂の重さを求める方法を記述する問題では、グラフを用いることは記述しているが、x座標を読むことについて記述していない、または、式を用いることは記述しているが、yの値を代入してxの値を求めることについて記述していないといった誤答が多く見られた。

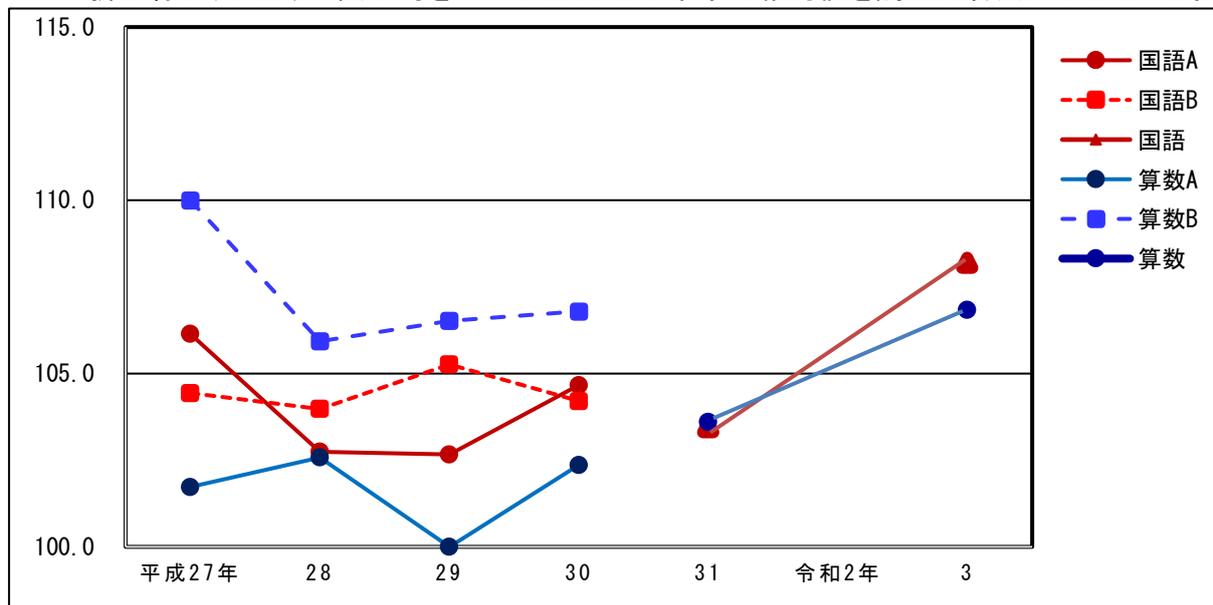
今後の取り組み

学習した数学用語を積極的に活用して自分の考えをノートに記述することを積み重ねることで、簡潔に説明できるよさに気付かせたい。また、授業者がノートに記述する時間を十分確保すること、学習者がノートに記述した内容を読み返したり振り返りをしたりする活動を取り入れることも併せて授業改善に取り組むことが有効であると考えられる。

6 6年間の経年変化

(1) 小学校

※折れ線グラフは、全国平均を100としたときの本市の相対値を調査内容別に示している。



【国語】			
実施年度	習志野市	全国	県
R3	70.0	64.7	65.0
H31	66.0	63.8	63.0

【算数】			
実施年度	習志野市	全国	県
R3	75.0	70.2	70.0
H31	69.0	66.6	66.0

【国語A: 主として知識】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	74.0	70.7	70.0
H29	77.0	75.0	75.0
H28	74.9	72.9	72.5
H27	74.3	70.0	71.5

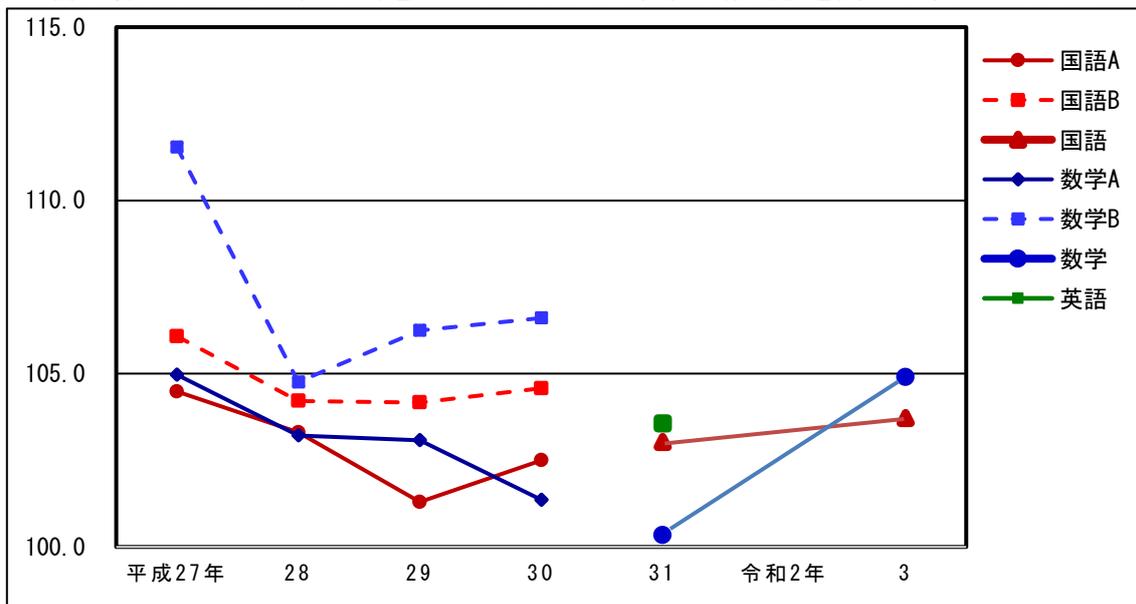
【算数A: 主として知識】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	65.0	63.5	62.0
H29	79.0	79.0	77.0
H28	79.6	77.6	76.5
H27	76.5	75.2	74.7

【国語B: 主として活用】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	57.0	54.7	53.0
H29	60.0	57.0	57.0
H28	60.1	57.8	57.7
H27	68.3	65.4	64.5

【算数B: 主として活用】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	55.0	51.5	51.0
H29	49.0	46.0	46.0
H28	50.0	47.2	47.1
H27	49.5	45.0	45.1

(2) 中学校

※折れ線グラフは、全国平均を100としたときの本市の相対値を調査内容別に示している。



【国語】			
実施年度	習志野市	全国	県
R3	67.0	64.6	65.0
H31	75.0	72.8	72.0

【数学】			
実施年度	習志野市	全国	県
R3	60.0	57.2	56.0
H31	60.0	59.8	58.0

【国語A:主として知識】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	78.0	76.1	76.0
H29	78.0	77.0	76.0
H28	78.1	75.6	76.1
H27	79.2	75.8	76.0

【数学A:主として知識】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	67.0	66.1	64.0
H29	67.0	65.0	63.0
H28	64.2	62.2	60.3
H27	67.6	64.4	63.4

【国語B:主として活用】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	64.0	61.2	61.0
H29	75.0	72.0	72.0
H28	69.3	66.5	66.9
H27	69.8	65.8	65.7

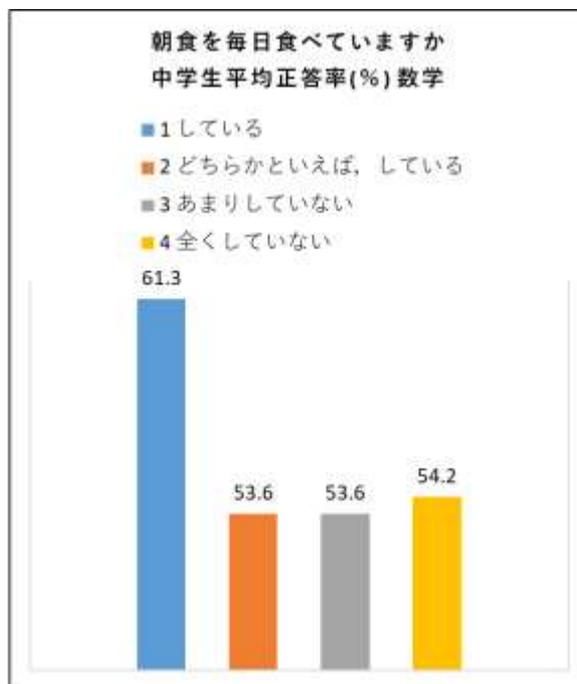
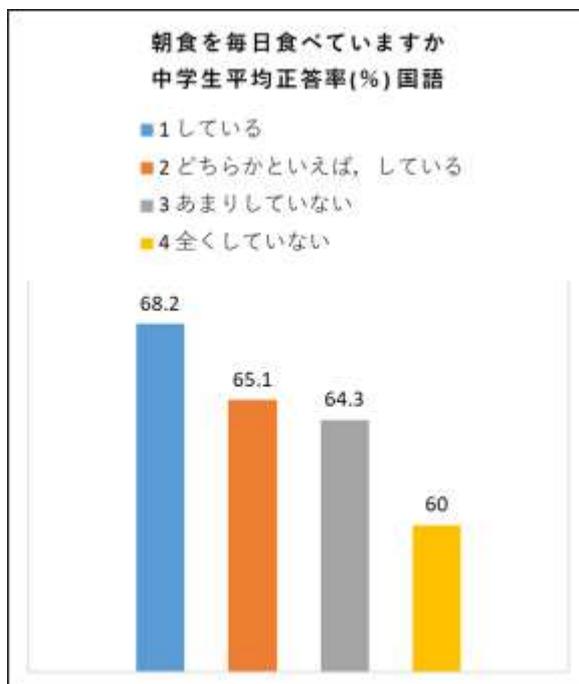
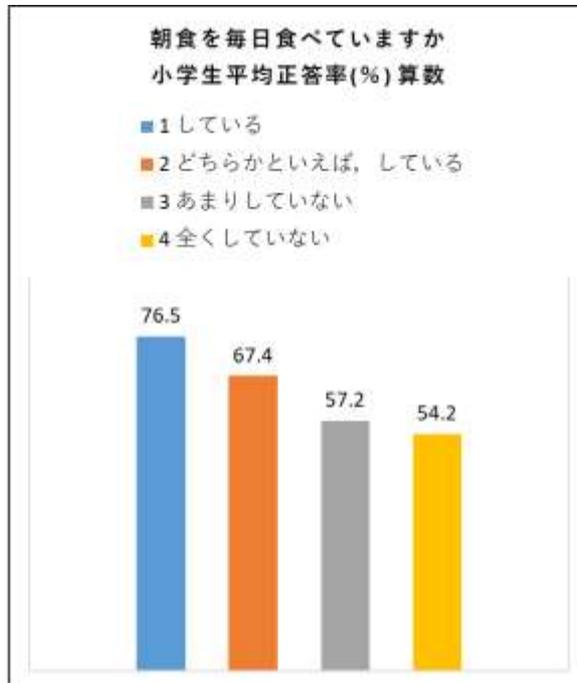
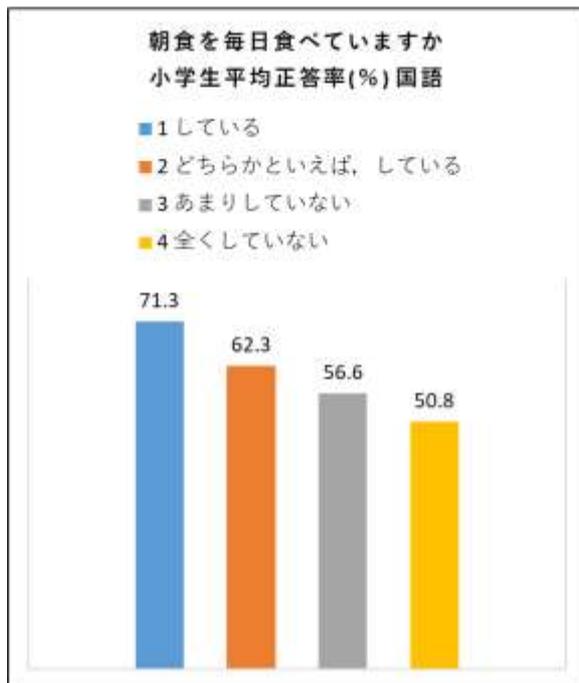
【数学B:主として活用】			
実施年度	習志野市	全国	県
H30	50.0	46.9	46.0
H29	51.0	48.0	47.0
H28	46.2	44.1	42.7
H27	46.4	41.6	41.6

【英語】			
実施年度	習志野市	全国	県
H31	58.0	56.0	56.0

7 児童生徒質問紙調査の回答結果と教科に関する調査の正答率との相関関係

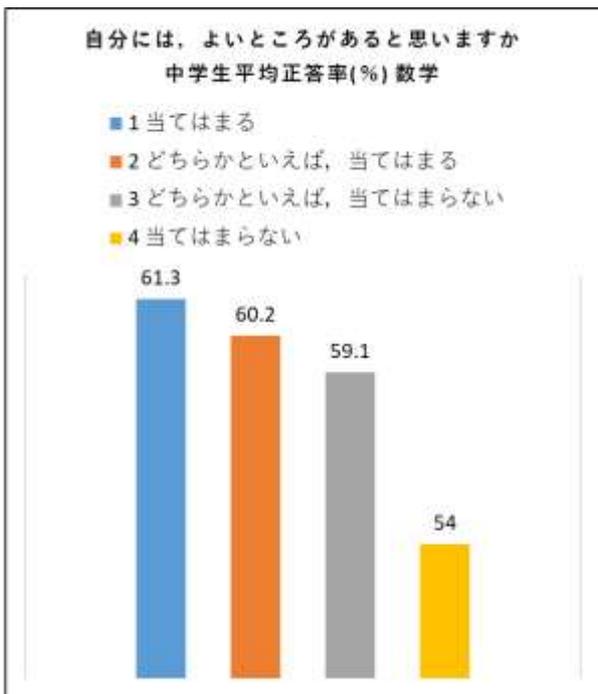
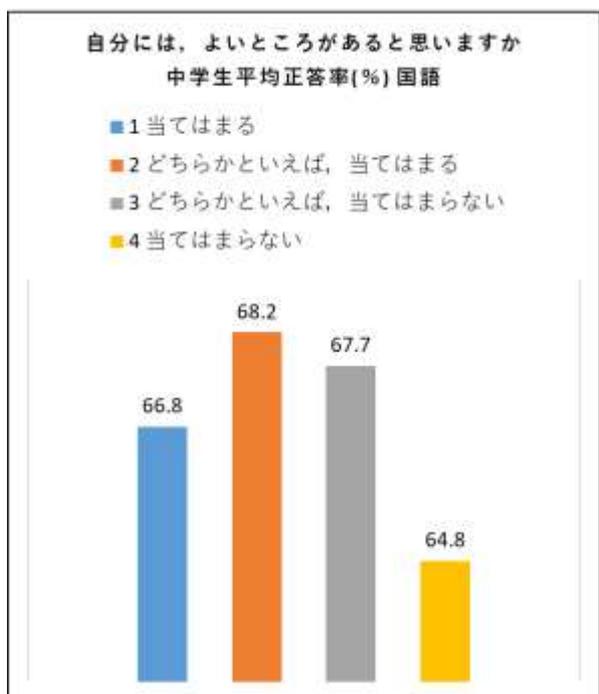
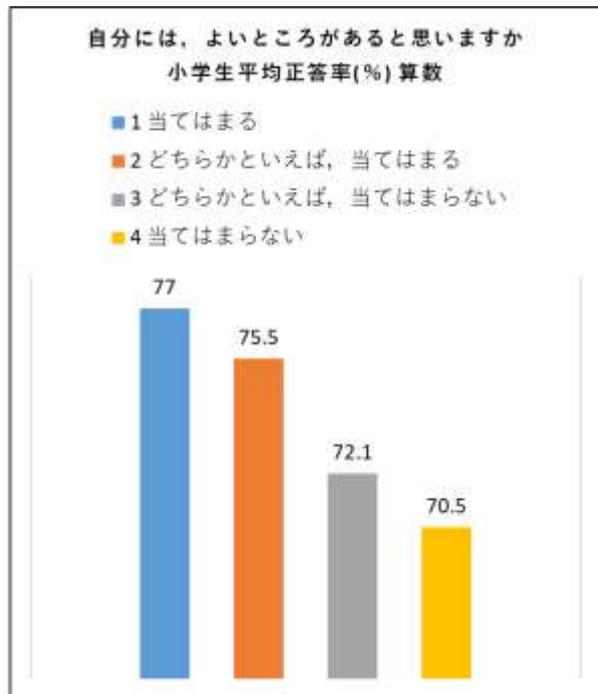
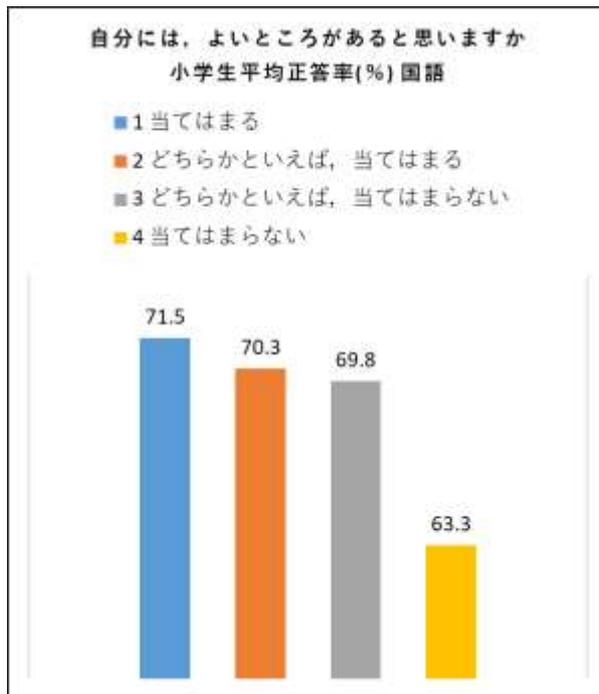
※質問事項に対する児童の回答(選択肢)と、教科に関する調査の正答率との関係を棒グラフで示しています。
ここでは、肯定的な回答(選択肢)と正答率の高さに大きな相関関係が見られるものを載せています。

Q:朝食を毎日食べていますか。



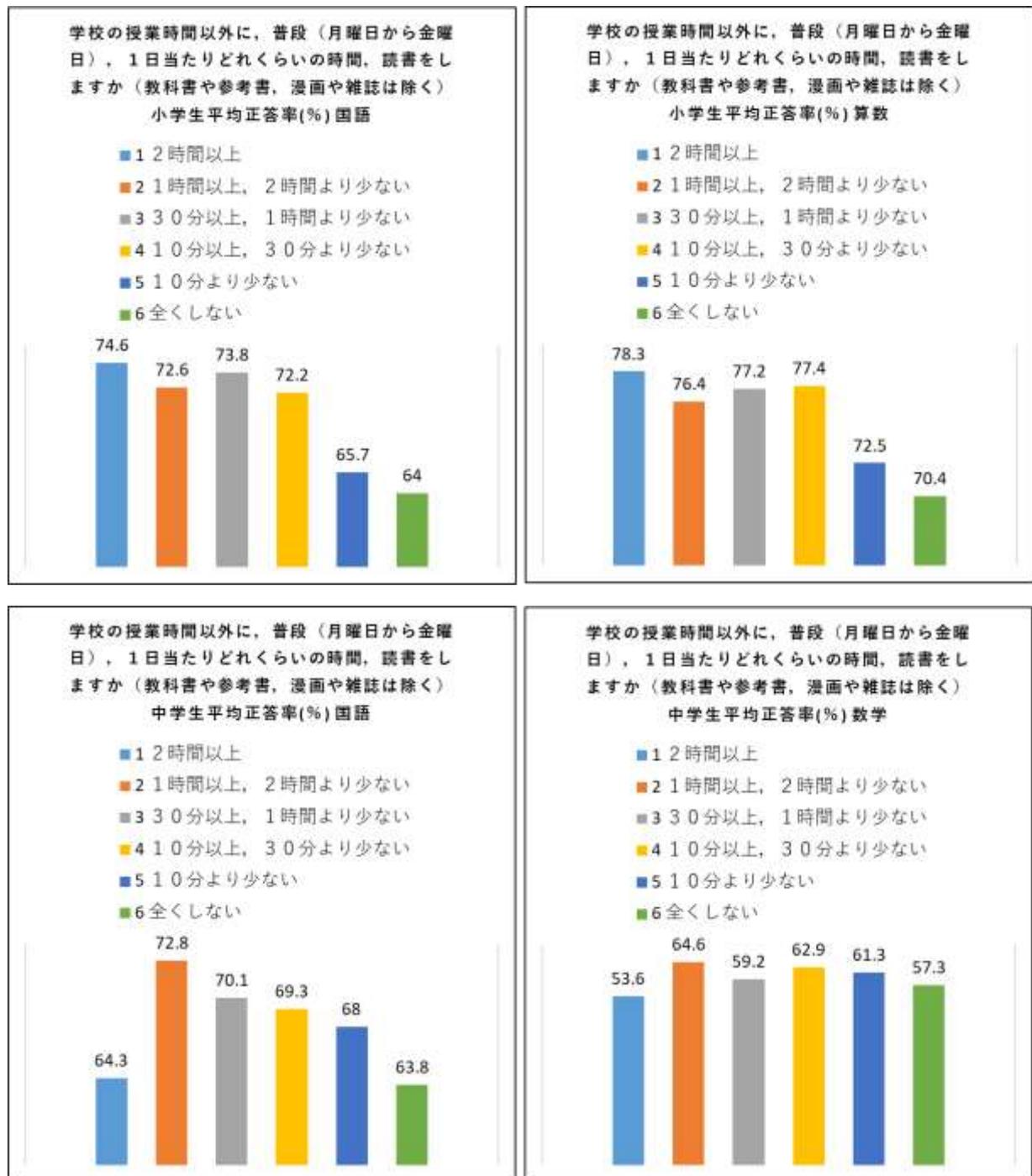
朝食を毎日食べる習慣がある児童生徒は、問題の正答率が高い。

Q:自分には、よいところがあると思いますか。



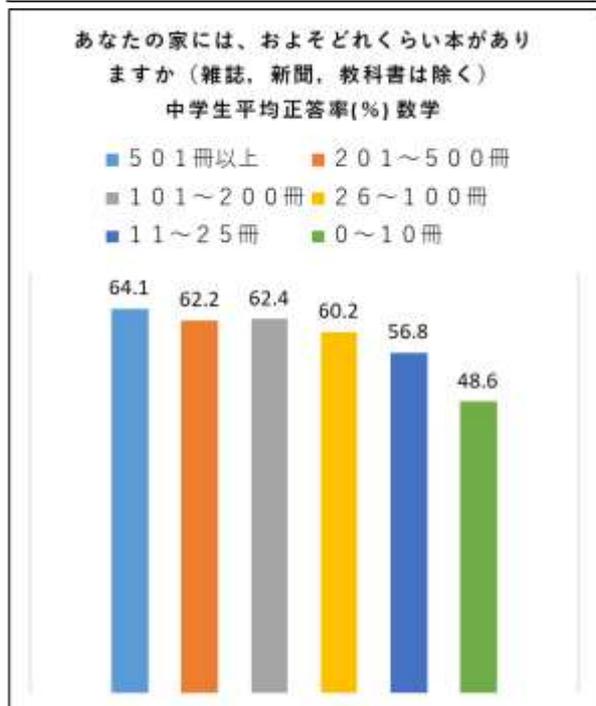
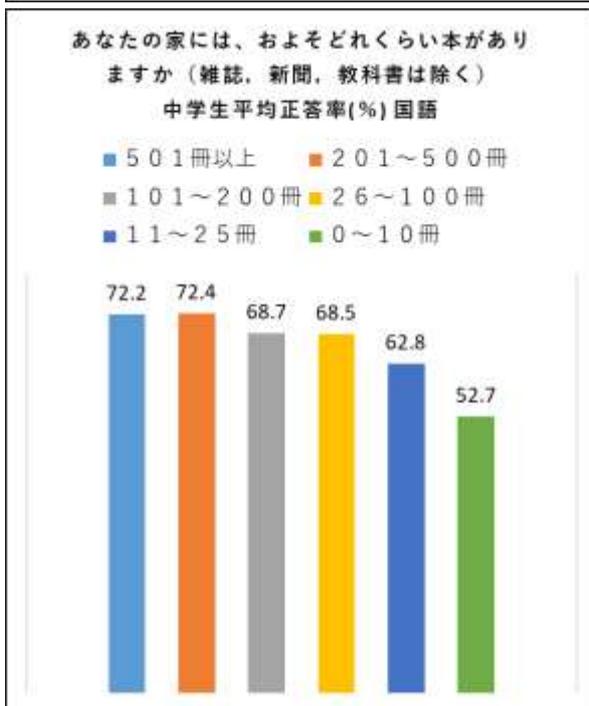
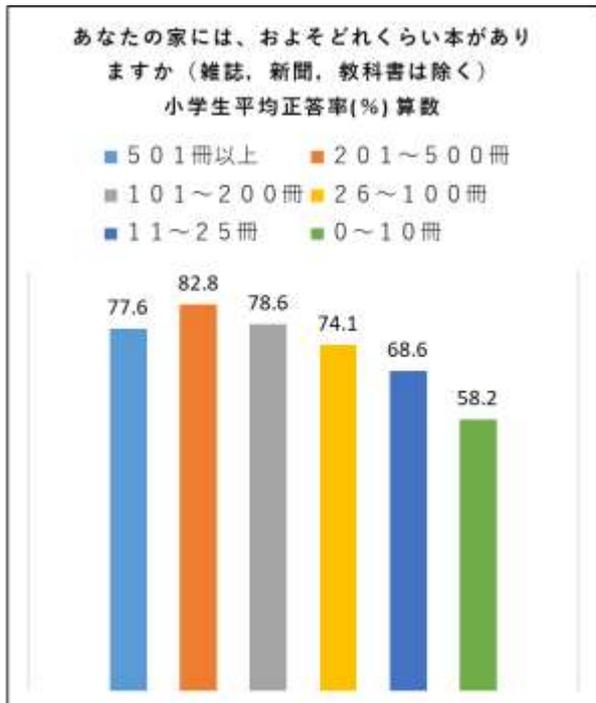
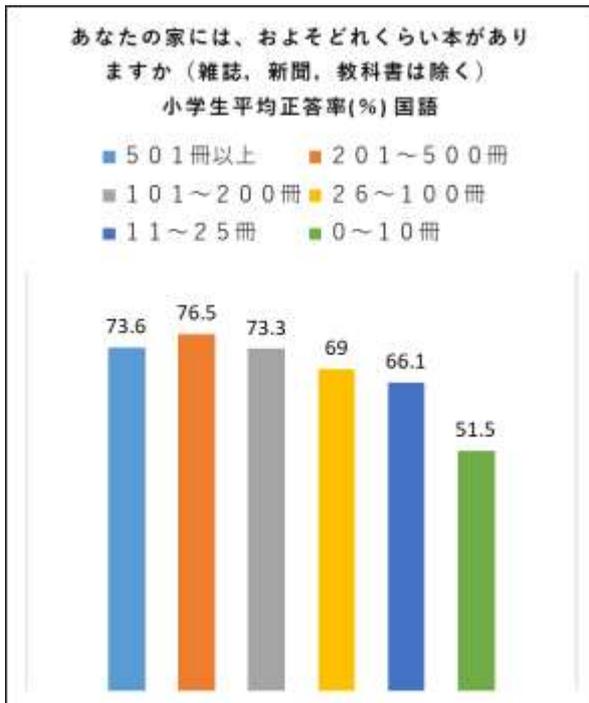
自己肯定感がある児童生徒の方が、問題の正答率が高い傾向が見られた。

Q: 学校の授業時間以外に、普段（月曜日から金曜日）、1日当たりどれくらいの時間、読書を行いますか（教科書や参考書、漫画や雑誌は除く）



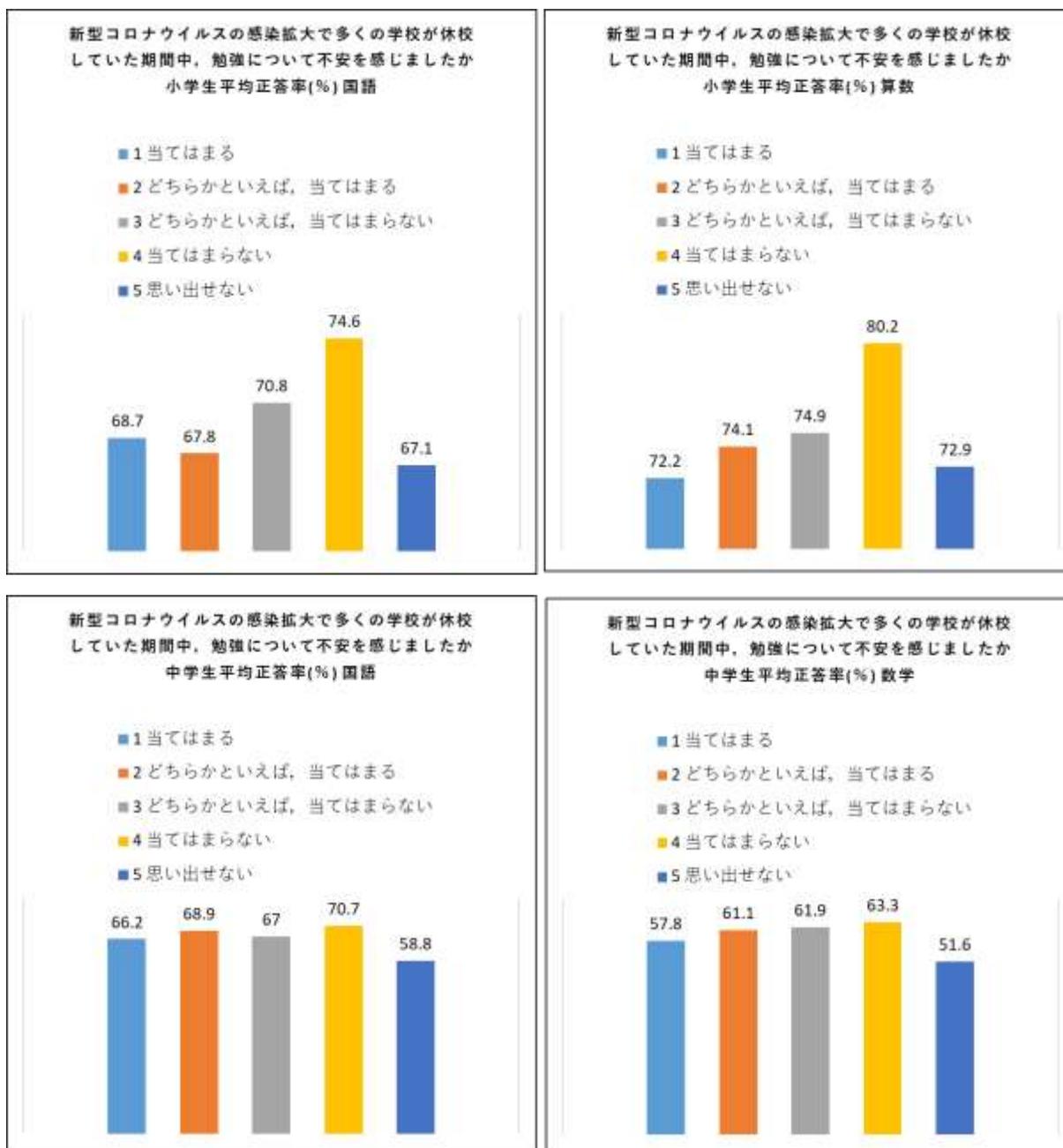
算数・数学においては、読書と正答率との相関関係はあまり見られない。

Q: あなたの家には、およそどれくらい本がありますか(雑誌、新聞、教科書は除く)



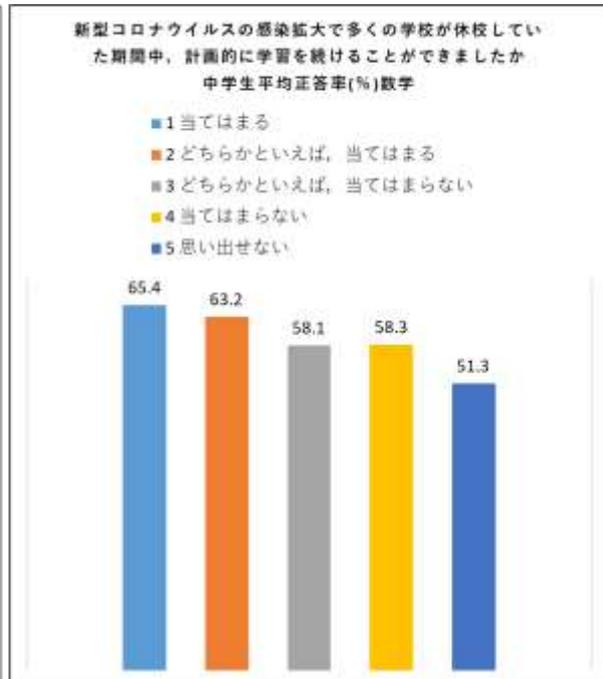
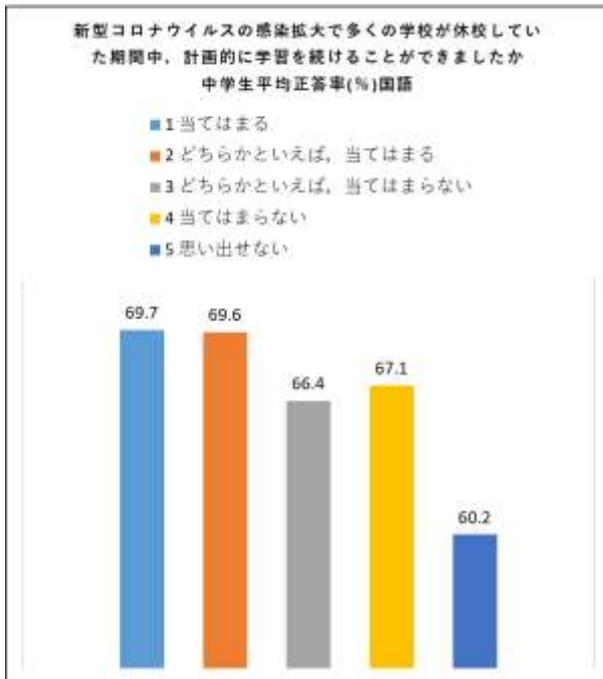
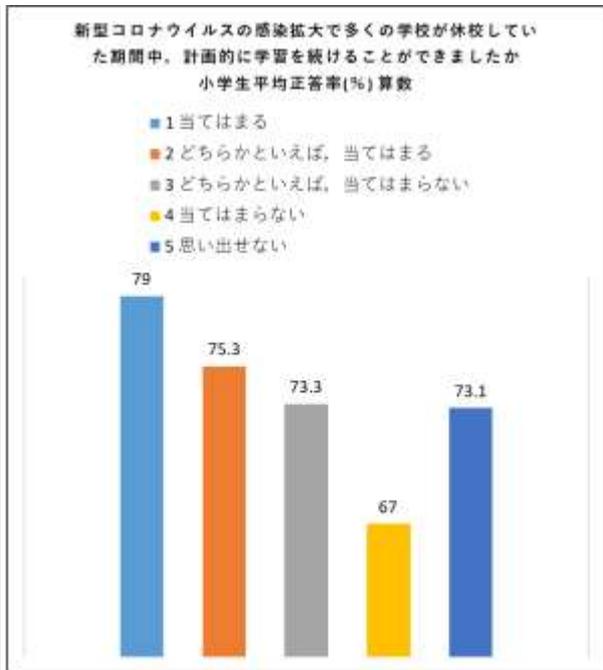
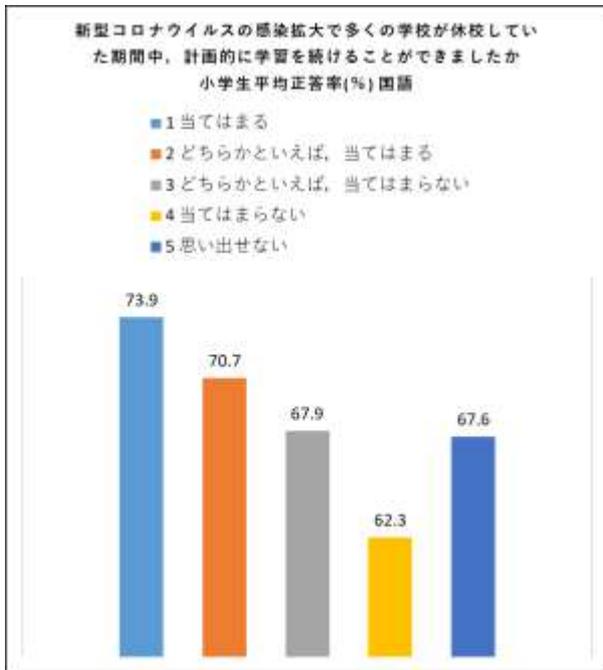
自宅の蔵書数が多い家庭の児童生徒の方が、正答率が比較的高い傾向が見られた。

Q:新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、勉強について不安を感じましたか



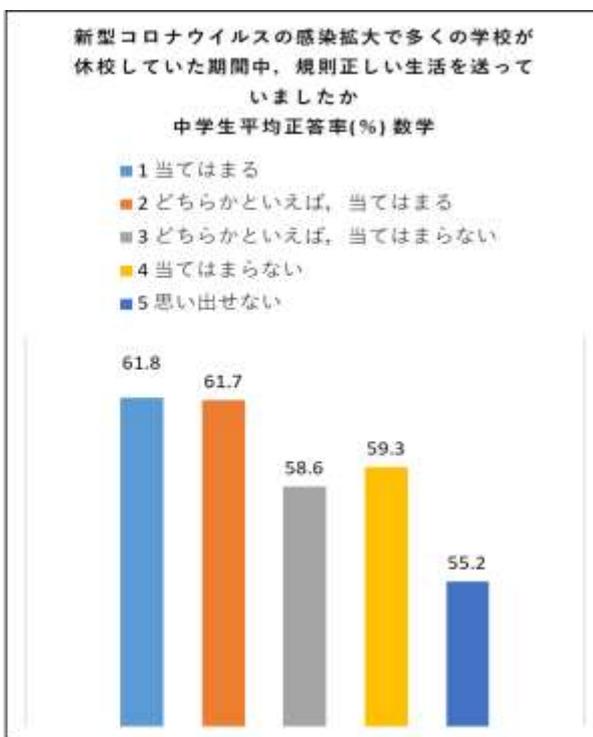
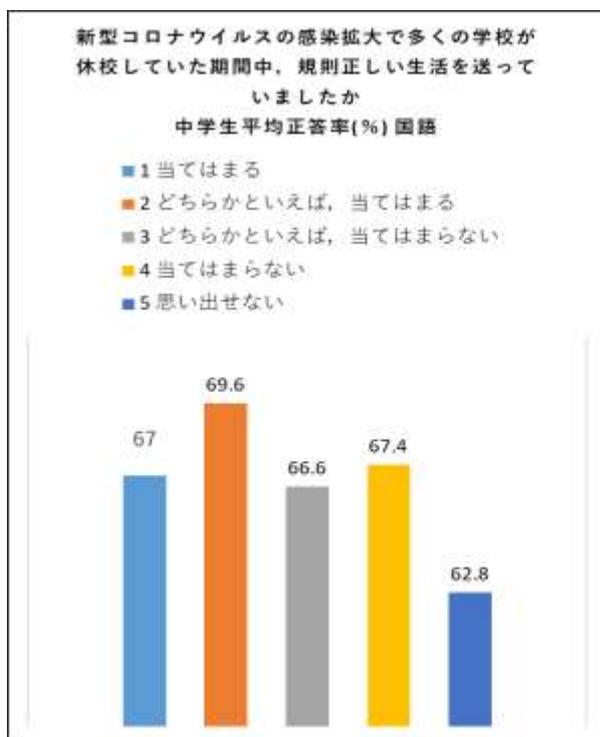
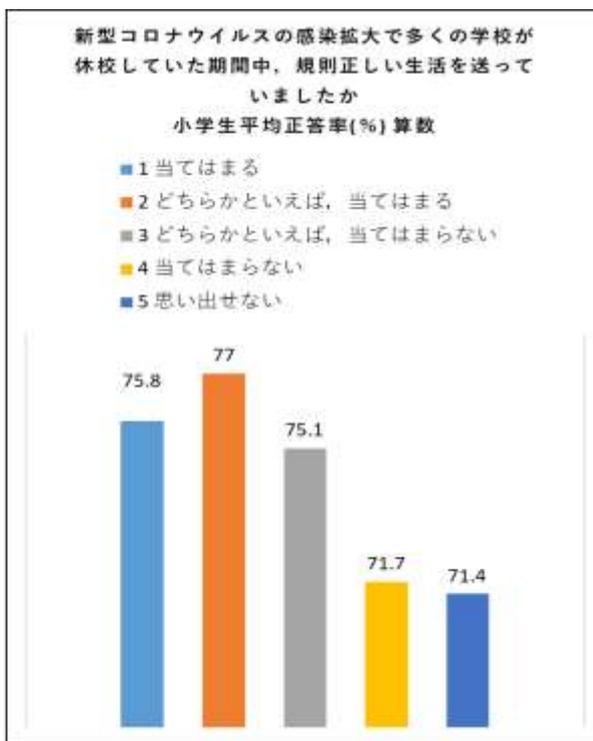
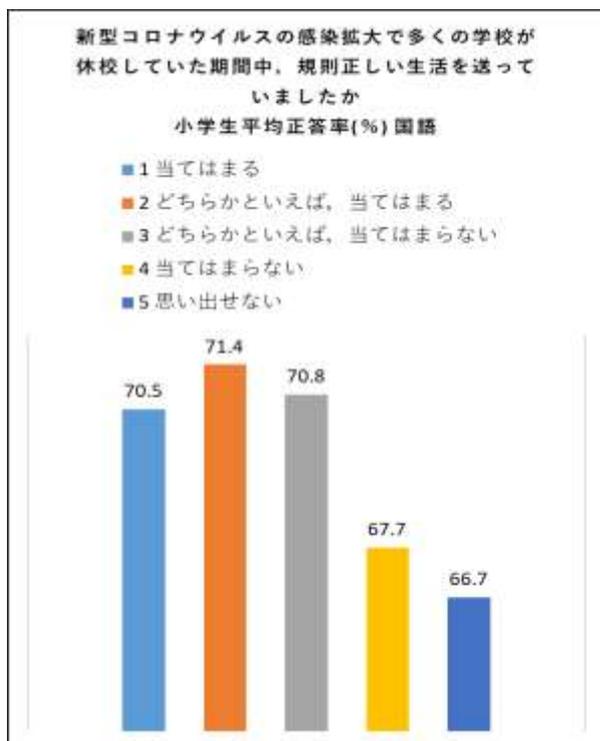
休校期間中、勉強に不安を感じている児童生徒の正答率がやや低い傾向が見られた。

Q: 新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、計画的に学習を続けることができましたか



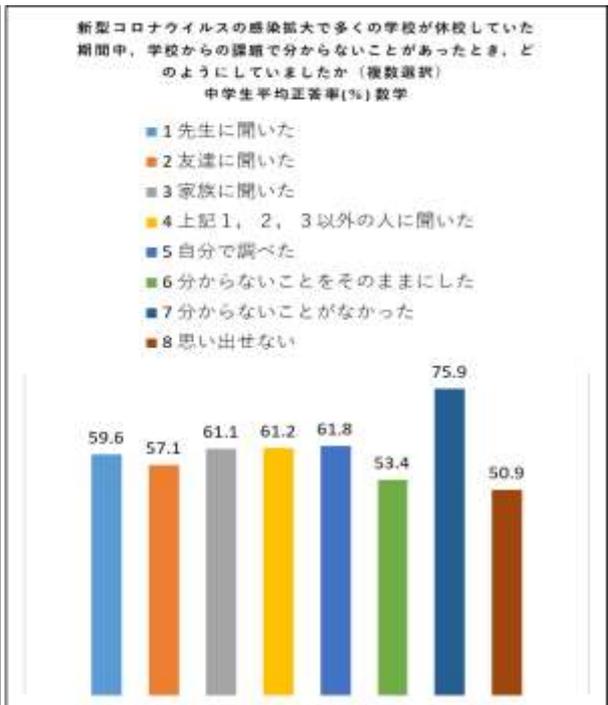
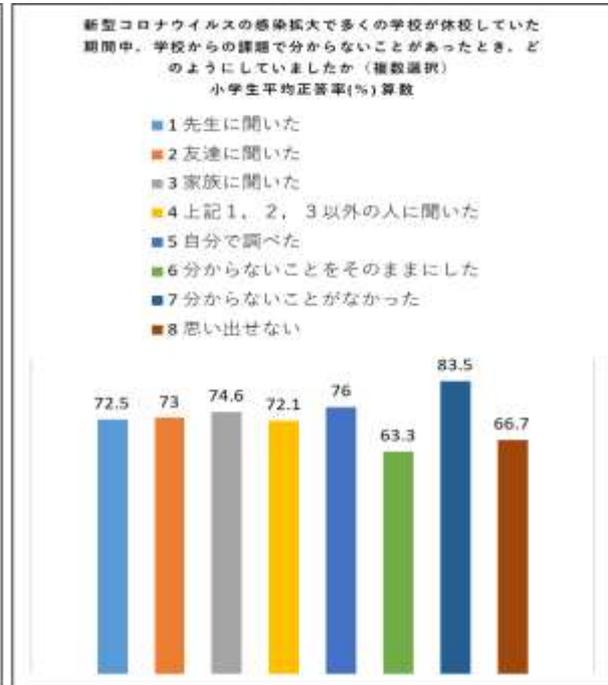
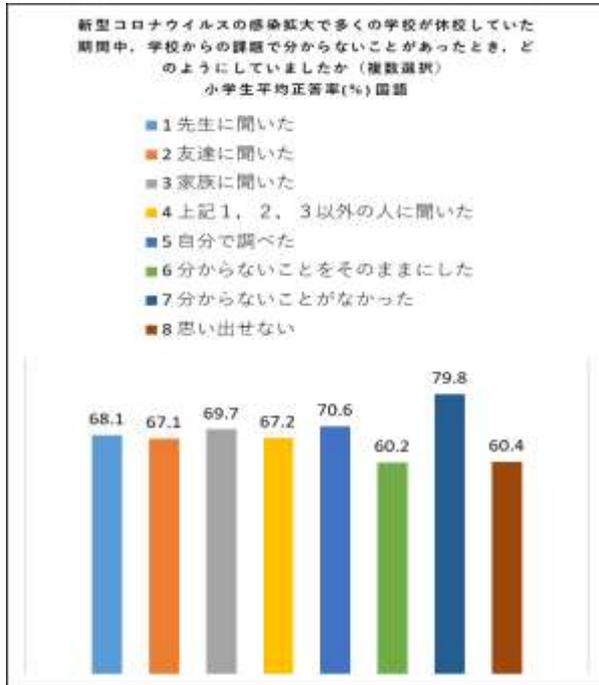
休校中であっても計画的に学習を進めることができた児童生徒の正答率が高い傾向が見られた。

Q: 新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、規則正しい生活を送っていましたか



休校中においても規則正しい生活を送っていた児童生徒の方が、正答率が高い傾向が見られた。

Q:新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、学校からの課題で分からないことがあったとき、どのようにしていましたか(複数選択)



休校中の学習で、わからない課題に対して「そのままにした」、「思い出せない」という児童生徒の正答率は低い傾向が見られ、解決方法の違いでは大きな差異が見られなかった。

8 調査結果についての考察

(1)教科に関する調査から

①国語では

「書く力」を伸ばしていくために、毎時間の授業の振り返りを自分の言葉で書く積み重ねを行っていく。

小学校、中学校ともに、平均正答率は全体的にも、領域別でも、全国平均を上回っている。どちらの校種においても、「話すこと・聞くこと」領域は、正答率が高い傾向にあった。これは、各校で培ってきた「話す」「聞く」についての学習習慣を基盤にして、国語の学習における言語活動を工夫し、対話的な学習を積み重ねてきたことの表れだと考える。

小学校・中学校に共通する課題として、「書く力」をいかにして伸ばすかが求められる。特に、設問の主旨を理解して、条件に合わせて適切に書くことは、これからも一層の努力が求められる。その「書く力」を伸ばすためには、「読むこと」と並行して考える必要がある。読書量や家庭の蔵書数に関する学力状況調査からは、日頃から読書活動に慣れ親しんでいる児童生徒の姿が見える。読書への関心の高さを各教科の学習活動にも反映させながら、文章の内容をつかむことや筆者の考えをつかむことにつなげていく。また、発達段階に応じた言語活動を設定し、表現することを楽しみながら継続して行うことや、「書く力」を伸ばしていくために、毎時間の授業の振り返りを自分の言葉で書く積み重ねを行っていく。

②算数・数学では

「ノートをつくる」活動の中に「脳に汗かく本気時間」を位置づけ、集中して自分の考えや解決方法などをノートに記述する時間を確保する。

小学校、中学校ともに、全国平均正答率は上回っており、平成31年度(令和2年度は新型コロナウイルス感染症予防のため未実施)の結果と比べると、小学校では2.4ポイント、中学校では2.6ポイント伸びている。

平成31年度と令和3年度の結果と比較してみると、特に「A 数と計算」や「短答式」「記述式」の正答率が伸びていることがわかったが、「記述式」については、正答率が6割を下回っており、大きな課題となっている。

「短答式」「記述式」といった計算方法や数学的な考え方を、数学的な表現を用いて記述できるようにするための手立てについては、授業の中で計算方法や考え方を「ノートにうつす」活動から、友達の発言を要約したり自分の言葉や数学的な表現を用いて記述したりする「ノートをつくる」活動を取り入れていく。また、「ノートをつくる」活動の中に「脳に汗かく本気時間」を位置づけ、集中して自分の考えや解決方法などをノートに記述する時間を確保する。そして、ノートに記述したことをもとに、解決の見通しをもち筋道立てて考え、統合的・発展的に考察し、数学的に表現する場を設けていく。

(2) 児童生徒質問調査から

①学習意欲と学力は相関関係にある。

国語や算数・数学の勉強は大切かどうかの質問に、8割以上の児童・生徒が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。国語や算数・数学の授業で学習したことは、将来、社会に出たときに役に立つと思うかについての質問に、7割の児童・生徒が「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答している。その回答結果と学力調査とのクロス集計で、「当てはまる」と回答した児童・生徒の平均正答率は高い傾向にあり、学習意欲と学力は相関関係にあることがわかってきた。

②基本的な生活習慣と学力は相関関係にある。

基本的な生活習慣についての質問では、「朝食を毎日食べていますか」という質問に、「している(毎日朝食を食べている)」と回答した児童・生徒の平均正答率が、「全くしていない(全く朝食を食べない)」と回答した児童・生徒の平均正答率よりも15～20ポイント以上高くなっていることがわかった。また、同じ時間に就寝・起床をしていると回答している児童生徒とそうでない児童・生徒にも同じ傾向がみられた。このことから、学習意欲だけでなく、基本的な生活習慣についても学力との相関関係にあることがうかがえる。

③自己肯定感や読書量等と学力は相関関係にある。

自分によいところがあるかの質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童・生徒についても、そうでない児童・生徒よりも平均正答率が高い傾向にある。また、読書量や自宅にある本の冊数(雑誌・漫画等を除く)が多い児童・生徒についても、そうでない児童・生徒よりも平均正答率が高い傾向にあり、自己肯定感や読書量等についても学力との相関関係にあることがわかってきた。

④新型コロナウイルス感染拡大で学校が休校していた期間中、勉強について不安を感じた児童・生徒の平均正答率はやや低い。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止による緊急事態宣言が発令され、4月及び5月の2か月の間、臨時休業となったことから、今年度の児童生徒質問紙には新型コロナウイルス感染症の影響と児童・生徒の学習状況等についての質問が4つ追加された。

本市では、新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、勉強について不安を感じたかについての質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童が約5割、生徒が6割以上おり、クロス集計から学力調査の平均正答率がやや低くなっていることがわかった。また、新型コロナウイルスの感染拡大で多くの学校が休校していた期間中、計画的に学習を続けることができたか、規則正しい生活を送っていたかについての質問に対して、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と回答した児童・生徒の平均正答率は高い傾向にあることがわかった。さらに、休校期間中、学校からの課題で分からないことがあったとき、どのようにしていたかの質問に対して、自分で調べたり教師や家族に聞いたりして解決したと回答した児童・生徒の平均正答率についても高い傾向にあることがわかり、ここでも生活習慣や学習意欲と学力との相関関係がうかがえる。

⑤タブレット端末を活用したオンライン学習の進め方や、不安を抱えている児童・生徒への支援についての研修を行うこと、各校の実践例等、情報収集に努め、市内で共有していくことを積極的に進めていく。

今後も新型コロナウイルス感染症による児童・生徒の生活環境や学習環境への影響は続くことが予想される中、タブレット端末を活用したオンライン学習の進め方や、不安を抱えている児童・生徒への支援についての研修を行うこと、各校の実践例等、情報収集に努め、市内で共有していくことを積極的に進めていく。